

特別支援教育委員会

1 研究テーマ

『特別な教育的ニーズのある子どもたちが、自立する力を身につけるための支援のあり方』

2 研究課題

特別支援教育委員会では「自立」を「それぞれの障害の状態や発達段階に応じて主体的に自己の力を可能な限り発揮し、より良く生きようとする」と定義づけ、過去5年間にわたり「自立する力」に焦点を当てて研究を進めてきた。さらに今年度は研究委員会全体のテーマ「確かな学力を育む授業の創造」を受け、「自立する力」と「確かな学力」の関連について検討を重ねた。その結果、「自立する力」を育むために個別の指導計画と照らし合わせながら「つきたい力」を明確にし、子どもの実態に合わせた支援をしていくことが、「確かな学力」を身につけることにもつながるのではないかと考えた。

今年度、研究を進めていく上で特に大切にしてきたことは次の3つである。

特別な教育的ニーズのあるすべての生徒を対象とした校内支援体制の確立。

めあてや見通しを持って主体的に活動に関われるような支援のあり方。

より良い人間関係が形成できるような支援のあり方。

3 指導の実際

(1) 校内の支援体制づくり

- ・高山中学校では特別支援コーディネーターと養護教諭、学年副主任を中心に「教育相談部会」を組織し、各学年の支援チームと連携をとりながら指導にあたるという形で支援体制を整えた。
- ・学習面や生活面で気になる生徒をリストアップし、教科担任者会で情報収集を行い、「教育相談部会」で支援方針について検討した。その後、保護者との懇談会や心理検査などを行い、支援の方向を決定していった。
- ・特に生活面や学習面で支援が必要な生徒には相談室などを使って個別に支援していくようにした。全職員の空き時間を割り振り、個別の時間割で支援し、各時間ごとに実施した内容を記録していった。また、スクールカウンセラーが週2日3時間ずつ支援できるようにした。

(2) A生のプロフィール

〔生徒の実態〕

- ・特別支援学級に在籍しており、5教科は特別支援学級で学習している。音楽は原学級と特別支援学級で受けており、ピアノを両手で弾く練習をしている。
- ・まじめに努力できる良さがあるが、主体的に他と関わる力が弱い。
- ・周囲の友だちの動きを見てそれに合わせて動くことのできるため、友だちと同じ活動に参加できるが、活動の中で自分から話しかけたり相談したりすることは少ない。



〔教育課題〕

- ・慣れた狭い人間関係だけでなく、学級や学年の仲間の中で認められる喜びを味わうことができる。自分の気持ちを自分の言葉で伝えることができる。
- ・ピアノや卓球などできそうなことに挑戦し、「できた」「やっと」という満足感を感じ、自分に自信が持てるようになる。

(3) 公開研究授業

期日	平成19年11月7日(水)
会場校・授業学級	高山中学校 3年 組(男子20名 女子15名 計35名)
教科および単元名	音楽 『ミニコンサートを開こう』
授業者	朝日 真理 教諭

(4) 授業の場面における考察

場面	児童の様子、教師の支援	考察
グループごとに練習する。	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏を始める場面でA生が友だちをリードし、「さん、はい」と声をかけた。 ・「どこからやる？」という友だちの問いかけに対し、「ここから」と指を指して答えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級で個別にピアノの練習をしたことや言葉のかけ方について確認したことで自信を持ち、積極的な行動につながったのではないか。
3～4つのグループに分かれて発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張のためか途中演奏が途切れてしまうこともあったが、うまく対応して最後まで演奏することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・練習で苦手な部分を繰り返し演奏してきた経験が、本人の自信につながったのではないか。
感想を書いたカードを交換して読み合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちに感想を書いてもらったカードをうれしそうな表情で何度も繰り返して読んでいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちから認められるということを実感し、その喜びを十分に味わえたのではないか。
本時のMVPを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・教師から本時のMVPとして3番目にA生の名前が呼ばれ、それを聞いてハッと顔を上げた。 ・「つかからないように、次はがんばる」とカードに次時への意気込みを書いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちだけでなく教師からも認められたことを実感し、それが次時へ意欲につながったのではないか。

4 この事例から明らかになったこと

- ・本人の得意なことや普段やっていること（今回の授業ではピアノ）を授業の中に取り入れることで、自信を持って活動に取り組めると同時に自分から積極的に活動に関わろうとする意欲を持つことができる。
- ・今回の授業では本人の実態に合わせて編曲し、本人用の楽譜を用意した。そうした配慮が「できる状況づくり」につながり、本人の意欲を高めることにつながったのではないか。本人の実態を見極め、それぞれの授業での目標をどこに設定するかということが重要になる。
- ・特別支援学級の音楽と連携し、個別に練習したことでピアノの演奏技術を高めることができ、自信を持って発表することができた。同じ教科が特別支援学級と原学級である場合には授業の内容や展開に十分配慮しながら進めることで学習の効果を高めることができる。
- ・友だちとの関わりを増やすことを目的に、特別支援学級で原学級の授業を想定して声をかける練習をした。その結果、グループごとに練習する場面で友だちに対して「さん、はい」と声をかけ、友だちをリードする姿が見られた。事前に言葉や行動について確認しておくことが主体的に活動に関わるための大きな支援となる。
- ・自分たちのグループが発表した後、友だちから寄せられた感想を何度も読み返している姿が見られた。友だちから認められる場面を設定することで、自信をより確かなものにするのと同時に、次時への意欲を高めることにもつながるのではないかと考えられる。

5 来年度への課題

- ・特別な教育的ニーズのある児童生徒の中に、通常の学級の在籍する児童生徒も含めた立場に立って構想図の見直しや更新をしていく。
- ・通常の学級と特別支援学級との連携、少人数のクラスの編成、T・Tによる指導など、特別支援教育における校内の支援体制のあり方について引き続き研究していく。
- ・児童生徒の理解をさらに深めた上で、1人1人の児童生徒の実態に合わせた支援の方法を探っていく。
- ・可能ならば、研究校だけでなく各委員が自校の実践を持ち寄って情報交換を行っていく。